

## 【研究報告】

## 看護技術における「触れる」ことの意義

整形外科看護師の生活行動援助技術を身体性の観点から探究して

川 西 美 佐\*

## 【要 旨】

本研究の目的は、整形外科看護師が生活行動援助技術を提供する際の「触れる」という行為に焦点を当て、看護技術における「触れる」ことの意義を明らかにすることである。看護師3名と患者4名を対象として、参加観察と面接によりデータを収集した。

研究の結果、「看護師が行った触れ方の意図」として、【注目を惹きつける】【行動に手を添える】【手をかざしつつ患者の動きを待つ】の3つの意図が見出された。【注目を惹きつける】触れ方について、看護師は《次に続く行為への合図を送る》意義があると認識していた。また、【行動に手を添える】触れ方について、看護師は《動きを支えると共に、動きに伴う恐れを支える》、患者は《覚悟ができる》意義があると認識していた。さらに、【手をかざしつつ患者の動きを待つ】触れ方について、看護師は《患者の意思に添う》、患者は《しなやかに触ってくれることにより痛みが一つ無くなる》意義があると認識していた。

【キーワード】看護技術、触れることの意義、身体性

## はじめに

近年、臨床では機械化が進展し、様々な看護技術が機械を介して行われるようになってきている。しかし、このような状況にありながらも、看護技術は看護師と患者の生身の身体を介して提供される、目的をもった行為であるという特徴に着目し、看護技術を「身体性」の観点から問い直す必要性が指摘されている(池川, 1991)。「身体性」の観点においては、身体と精神は二分されたものではなく、そのどちらにも還元できない両義的な存在としてとらえられる。われわれは身体を見たり触れたりする対象としてとらえるが、同時に身体によって見たり触れたりする。前者において身体は対象とされる客体であるが、後者において身体は見たり触れたりする主体となる。このような両義的な身体の在り方を「身体性」という(廣松他, 1998)。

池川(1991)の指摘を受けて、本研究者は先の研究(川西, 2003)において、看護師が自らの身体を介して患者の身体に働きかけるときの両義的な身体の在り方を「看護技術における身体性」ととらえ、看護技術における身体性について、これまで文献でどのように論じられてきたかを探究した。その結果、看護技術における身体性には、身体と精神を二分で

きない両義的な身体の在り方の他に、看護師と患者両者の相互的な身体の在り方があることが明らかになった。

加えて、1970年代には盛んに身体性の観点について論じられていたものの、1980年代以降今日に至るまで、看護技術の探究は客観的・科学的法則性の実証が主流となり、身体性の観点からの探究は未だ不十分であることが明らかになった。そして、看護技術における身体性を探究するには、優れた看護師の技を観察し記述することが必要であると示唆された。

しかし通常、我々が自己の身体を意識するのは病気の時など身体がよく働かない時であり、優れた看護師の技のように「自然に」「さりげなく」行われる場合の身体性は、行為者本人には意識化され難い。そこで、視覚や聴覚よりも触覚において身体性が立ち現れやすいという指摘(野島, 1977)をもとに、看護師が患者に「触れる」という行為がもつ意義(意味・価値)に焦点を当てて、看護技術における身体性を探求することとした。

看護師が患者に「触れる」という行為がもつ意義については、1970年代以降「タッチ」「タッチング」というテーマで探究されており、がん患者・認知症の高齢者・重症心身障害児へのセラピーティック

\*日本赤十字広島看護大学

タッチ、新生児へのタッチケアなど、様々な対象への「タッチ」「タッチング」の意義が示されている(藤野, 2003)。しかし、臨床看護師が最も密接かつ日常的に患者に触れる機会となる生活行動援助において「タッチ」「タッチング」の意義が示されている研究は少ない。これは、生活行動援助においては「触れる」ことが第一義的な目的ではないため、その意義を行為者が意識し難いことにより、「触れる」ことの意義が行為に埋没されたまま明らかになっていないためと思われる。

そこで、看護技術における身体性の探究の一環として、整形外科看護師が患者に生活行動援助技術を提供する際に行われる「触れる」という行為に焦点を当てて、看護技術における「触れる」ことの意義を明らかにすることを目的として本研究に取り組んだ。

なお、本研究では、看護技術を提供する際に、看護師が自らの身体を介して患者の身体に働きかけるときの両義的かつ相互的な身体の在り方を探究するため、「タッチ」「タッチング」という表現ではなく、「触れる」という表現を用いた。

## 研究方法

### 1. データ収集期間

平成16年3月

### 2. 研究対象者

広島県内の総合病院における1整形外科病棟に勤務する看護師3名、並びに、同病棟に入院中の患者4名を研究対象者とした。

看護師は、臨床経験5年以上で、データ収集期間中に日勤帯で複数日勤務している者の中から、本研究への協力の同意が得られた者とした。看護師の概要は、臨床経験8～19年(平均13.3年)、整形外科病棟での臨床経験5ヶ月～6年(平均3.7年)であった。

患者は、研究対象者となった看護師が生活行動援助を行う場面を参加観察できた者とした(患者の概要は表1参照)。データ収集当初は、看護師が生活

行動援助技術を提供する際に患者に「触れる」時の、看護師と患者の相互性を明らかにするために、3名の看護師それぞれが生活行動援助を行った患者を面接の対象とするよう計画していた。しかし、参加観察した患者の中で認知障害がある者は面接の対象から除外したため、面接できたのは1名の看護師が生活行動援助を行った患者2名となった。

なお、データ収集をした病棟は、病床数52床であり、データ収集期間中平均50名の患者が入院していた。入院患者は整形外科疾患のみで、主に周手術期であった。また、看護方式としてプリマリーナーシングを採用しており、看護師は2～3名の患者を受け持っていた。また、日勤帯では、アソシエートナースとして他の患者も担当し、5～6名程度の患者の看護を行っていた。

### 3. データ収集方法

#### 1) 参加観察法

看護師が生活行動援助技術を提供する際に行われる「触れる」という行為は、行為者である看護師にとっても受け手である患者にとっても意識し難い。そのため、両者の面接において「触れる」という行為を想起して貰う手がかりとするために、面接に先立ち、看護師が患者に生活行動援助を実施する場面に研究者が援助の介助者として参加し、援助の様子を観察した。

観察は1名の看護師につき2～3日行い、生活行動援助を行う場面を各看護師3～6場面観察した。観察した援助項目は、入浴介助・清拭・陰部洗浄・洗髪など清潔に関する援助、並びに、車椅子とストレッチャーによる移動に関する援助である。観察した内容は、観察後にフィールドノートに記述した。

#### 2) 面接法

看護師の面接は、参加観察後に、インタビューガイドに基づいて半構成的に1回行った。面接時間は看護師の意向に合わせて日勤終了後とし、所要時間は70～90分(平均80分)であった。面接場所は、他者に面接内容が聞こえない所とし、病院内の個室で行った。看護師のインタビューガイドは、藤野

表1. 研究対象者(患者)の概要

ID	年齢 性別	疾患名	参加観察の時期	認知障害	参加観察後の面接
a	65歳 男性	左大腿骨頸部内側骨折	術後1～3日目	なし	実施
b	82歳 女性	右変形性股関節症	術後8日目	なし	実施
c	85歳 女性	左大腿骨内顆骨折	術後6週目	あり	—
d	94歳 女性	左大腿骨骨幹部骨折	術後9週目	あり	—

(2003)が終末期癌看護に携わる看護師の効果的なタッチについて調査した際の枠組みを参考にして作成した。面接内容は、参加観察した場面で看護師が患者に触れた時に、①意図して行った触れ方、②触れた時の印象、③意図して触れたことがもたらした効果の3点とした。

また、患者の面接も参加観察後に1回行った。面接時間は患者の都合のよい時間とし、所要時間は20～30分(平均25分)であった。面接場所は、他者に面接内容が聞こえない所とし、病棟内で行った。面接内容は、看護師から生活行動援助を受けた際に、看護師が自分の身体に触れた時の印象とした。

面接内容は、同意が得られた場合はテープに録音し、得られなかった場合は許可を得てメモをとり、それぞれ面接後に逐語録を作成した。

#### 4. データ分析方法

参加観察および看護師の面接で得られたデータから、参加観察した場面において、「看護師が行った触れ方の意図」を抽出して、3名の看護師を比較し類似性を検討してカテゴリーを作成した。次に、「看護師が行った触れ方の意図」ごとに「看護師が認識する『触れる』ことの意義」を抽出してカテゴリーを作成した。さらに、患者の面接で得られたデータから、「看護師が行った触れ方の意図」の場面ごとに、看護師の「触れる」行為に対する患者の印象を抽出し、「患者が認識する『触れる』ことの意義」としてカテゴリーを作成した。

#### 5. 倫理的配慮

看護師には、協力を依頼する際に、研究の目的と方法、自由意思に基づく任意の協力であり途中辞退が可能であること、得られたデータは匿名で扱い本研究以外の目的には使用しないこと、研究成果は公表する予定であることを、文書を用いて説明したうえで同意を得た。

また、患者には、参加観察をする前に挨拶し、援助に参加することの了解を得た。認知障害があり患者から直接了解が得られない場合は、患者の家族から了解を得た。加えて、参加観察後に面接を依頼する際は、看護師と同様の内容を、文書を用いて説明したうえで同意を得た。

### 研究結果

データを分析した結果、「看護師が行った触れ方の意図」として、【注目を惹きつける】【行動に手を添える】【手をかざしつつ患者の動きを待つ】の3

つの意図が見出された。この3つの意図について、それぞれ「看護師が行った触れ方の意図」を説明したうえで、その場面における「看護師が認識する『触れる』ことの意義」および「患者が認識する『触れる』ことの意義」について述べる。

#### 1. 【注目を惹きつける】

##### 1) 看護師が行った触れ方の意図

【注目を惹きつける】ことを意図した触れ方は、看護師A・B・Cの3名共に観察された。

まず、看護師Aは、大腿骨頸部内側骨折術後の患者aの清拭をした場面において、背部を清拭するために、患者aを仰臥位から側臥位に体位変換する際に、体位変換する側に立って、動いて貰う前に、動く側の手に掌を当てて触れながら、どちらに向くかを言葉で説明していた。また同様に、変形性股関節症術後の患者bの下肢を清拭をした場面においても、患肢を動かす時には掌で患肢の足先にゆっくりそっと触れながら、次にどのように患肢を動かすかを言葉で説明していた。【注目を惹きつける】ことを意図した触れ方について、看護師Aは次のように語った。

「言葉だけで『こっち側に向きます』とか『この手を動かしてください』と言っても、どの手をどう動かすことかわからないので、掌を当てたりポンポンと叩く事で、『あ、こっち側に向くのか』というのがわかりやすいと思うし、スムーズに動くことができる。意図としては、ちゃんと注目して貰いたいというのがある」

次に、看護師Bは、大腿骨内顆骨折術後の患者cの入浴介助をした場面において、車椅子から入浴用椅子に移動する際に、患者cの肩や背部に掌を当てて触れながら、次に何をするかを言葉で説明していた。この触れ方も【注目を惹きつける】ことを意図しており、看護師Bは次のように語った。

「『これから何をしますね』『これから一緒にこれをしてしょう』と伝える時に、声を掛けるだけでなく、肩をポンポンと触ったり、背中をさすりながらの方が、次に何をするかが伝わり易いと思う」

さらに、看護師Cは、大腿骨骨幹部骨折術後の患者dの清拭をした場面において、ベッドに端座位になった患者dの正面に立って、患者dの肩に掌で触れながら、「今から身体を拭くから、しっかり座っていきましょうね」と声をかけていた。患者dは一人では座位が十分保持できず、上体が振り子のように左右に揺れていた。この場面での触れ方も【注目を惹きつける】ことを意図しており、看護師Cは次の

ように語った。

「患者dには自立に向けて一人で座位の保持をし、欲しいと思っているので、座位の保持に対しては触れないようにしている。ただ、いつももっとしっかり座っていただけるのに、あの場面では上体が揺れていたの、今日はどうしたのかな、今から身体を拭くから、しっかり座っていきましょうという思いで、手を出して触れていた」

## 2) 看護師が認識する「触れる」ことの意義

【注目を惹きつける】ことを意図した触れ方の意義について、看護師A・B・Cは《次に続く行為への合図を送る》と認識していた。

まず、看護婦Aは次のように語った。

「整形外科疾患の患者は、動くことが痛みにつながるから、身体を動かす場合には、心づもりをして貰うために動かす前にまず触れて、ワンクッションおいてから動かすようにしている」

また、看護婦Bも同様で、【注目を惹きつける】触れ方によって「次に何をすることが伝わり易い」と、次に続く行為への合図として意義を認識していた。さらに、看護婦Cも、【注目を惹きつける】触れ方によって「今から身体を拭くから」ということを合図していた。

【注目を惹きつける】ことを意図した触れ方は、それ自体で意図が終了する訳ではなく、【注目を惹きつける】触れ方を契機として、次に続く行為を予告するという合図の意義があった。

なお、【注目を惹きつける】ことを意図した触れ方に関して、患者の語りから意義は見出せなかった。【注目を惹きつける】ことと、その次に行われる【行動に手を添える】【手をかざしつつ患者の動きを待つ】ことは連続している。そのため、患者にとっては【注目を惹きつける】ことだけを取り出してその意義を認識し難いため、語りから意義を見出せなかったと考える。

## 2. 【行動に手を添える】

### 1) 看護師が行った触れ方の意図

【行動に手を添える】ことを意図した触れ方は、看護師Aにおいて観察された。看護師Aは、患者aの清拭をした場面において、【注目を惹きつける】ことを意図して動く側の手に掌を当てて触れた後に、患者aの手関節を握り、患者aには看護師Aの手関節を握って貰い、両者が手を握り合うようにして、側臥位になる方向に患者の身体を動かしていた。【行動に手を添える】ことを意図した触れ方について、看護師Aは次のように語った。

「背部に敷いたバスタオルだけ持って身体を横に向けると、動いた瞬間に患者の手が宙を掴むようになる。その時に手を握り合っていると、患者も握り返してきて、安心して動けるという感じがあるため、意識的に手を握り合って動かしている」

### 2) 看護師が認識する「触れる」ことの意義

【行動に手を添える】ことを意図した行為の意義について、看護師Aは《動きを支えると共に、動きに伴う恐れを支える》と認識しており、次のように語った。

「動く間に手を握り合っていると、動いた瞬間の痛み患者が驚き、慌てて手が宙を掴むようになるのを防げる。別の方法としてベッド柵を持って貰っても、動く瞬間に痛みがあると柵を持った手を放す患者がいる。手を握り合っていると、手をはね除けることはないから安全に動ける。ただし、患者が先走って動きそうになったら、握っている手に力を入れて動きを制止したりもする」

看護師Aが言う「手が宙を掴む」動作によって、患者は不自然な身体の動きになり、ますます痛みが強くなってしまい、スムーズに動けなくなる。このことを懸念して、看護師Aは手を握り合って患者を動かしていた。この触れ方は、特に、痛みのために動くことを恐れて「動くことに勇気がある患者」や、認知障害があつて、動くことを説明しても「何をされるのだろうと不安が強い患者」の場合によく用いられていた。そのため、この触れ方には、身体を仰臥位から側臥位に動かすという身体の動きを支えるだけでなく、身体の動きに伴う痛みへの恐れを支える意義があった。そして、握った手で動くことを誘導し、あるいは動きすぎるのを抑止するという、誘導と抑止の細やかな調整によって、結果的に患者はスムーズに動けるようになっていた。

### 3) 患者が認識する「触れる」ことの意義

患者aは、看護師Aの清拭を受けた時の触れ方がもたらす意義について、《覚悟ができる》と認識しており、次のように語った。

「横を向く時に気になるのは創の痛みである。手術後に初めて身体を拭いた時には、これから何をするのか説明もなく、急に回診に来て、足に枕を挟まれた。今からいったい何をするのかと思い、創が痛くないかが気になって、身体を拭かれたという感じがなかった。看護師Aのように、朝のうちにこれから何をするかを言って貰い、動くときに手を持って貰うと、覚悟ができる」

### 3. 【手をかざしつつ患者の動きを待つ】

#### 1) 看護師が行った触れ方の意図

【手をかざしつつ患者の動きを待つ】ことを意図した触れ方は、看護師A・B・Cの3名共に観察された。

まず、看護師Aは、患者bの下肢を清拭をした場面において、【注目を惹きつける】ことを意図して、掌で患肢の足先に触れた後に、看護婦Aの掌を患者bの患肢から5cm程度離して患肢にかざすようにし、患者bが自分で患肢を動かし始めてから再び掌で患肢に触れていた。この触れ方は【手をかざしつつ患者の動きを待つ】ことを意図しており、看護師Aは次のように語った。

「患者が『無理矢理動かされた。訳がわからないうちに動かされた』とよく言う。患者本人が動かす気になって動けたということが一番良いと思うから、患者の動き始めを待っている」

また、看護師Bは、患者cの入浴介助をした場面において、【注目を惹きつける】ことを意図して、患者cの肩や背部に掌を当てて触れた後に、患者cの腰部に両手を回して車椅子から立ち上がらせた。その後、車椅子の横に並べた入浴用椅子に移動する時に、腰部に両手を回したまま移動するのではなく、患者cの背部に両手をかざして一瞬動きを止めていた。この行為によって、患者cは立位になる時には固まったように垂直に伸ばしていた両手で看護師Bにしがみつき、両者が抱き合う形で椅子に移動していた。この触れ方も【手をかざしつつ患者の動きを待つ】ことを意図しており、看護師Bは次のように語った。

「患者cが私を掴もうとするのを期待していた。しがみついてくれたら、入浴用椅子に今移ることをわかってきていると思うし、相手に同意を得たと思えるから、触れるまでに一瞬時間をおいてみた」

しかし、看護師Bは、患者cの陰部洗浄をした場面については、「洗浄する時に必ず陰部を隠される。そして陰部に触れた途端に身体がキュッとカチカチに固まる。『やめて!』という感じの強ばりで、自分を防御するための行動のように感じる」と語った。看護師Bは、患者cに触れた時の印象から、陰部洗浄をされるのが嫌なのだ、この援助については同意を得られないのだととらえていた。これは、入浴など患者cにとって心地よいと思われる場面では、協力しようという手足の動きがあることとの比較によってとらえたことであった。認知障害により言語で表現できない患者cの拒絶の感触を、身体の強ばりからとらえた看護師Bは、できるだけ陰部に触れな

いようにして素早く洗浄を済ませるようにしていた。

さらに、看護師Cは、患者dの清拭をした場面において、【注目を惹きつける】ことを意図して、患者dの肩に掌で触れた後に、患者d自身が胸部をゆっくり拭いている間、座位の姿勢が安定せず左右にふらつく患者dの体側に、触れるか触れないかの位置で両手をかざすようにしていた。そして、姿勢が傾いて、看護師Cがかざした手に患者cの身体が触れた時には、姿勢が真っ直ぐになるように、患者cの体側に掌で触れて身体を押し返していた。この触れ方も【手をかざしつつ患者の動きを待つ】ことを意図しており、看護師Cは次のように語った。

「整形外科疾患の患者は動きに障害があるため、中途半端に動いてしまうから危険だ。だから、『何時でも手が出せるから大丈夫』『すぐに支えることができる』という私の体勢が患者にわかるように、また、私自身もいつ患者が転んでも対応ができるという覚悟をしながら、いつでも支えることができるように手をかざして構えている」

【手をかざしつつ患者の動きを待つ】触れ方では、看護師は患者の身体には接触していない点で、【行動に手を添える】触れ方とは異なっていた。【手をかざしつつ患者の動きを待つ】触れ方では、患者の手や肩から数cm離れた所に看護師の掌をかざすように位置している。この触れ方では、看護師と患者の皮膚は接触していないが、患者の身体と看護師の掌との空間には看護師の意図が働いており、常に触れる構えができているという点で、「触れる」としてとらえた。なお、【行動に手を添える】触れ方では、看護師が触れた手で患者の動きを誘導したり抑止する能動的な働きをしていたが、【手をかざしつつ患者の動きを待つ】触れ方では、患者の能動的な動きを引き出すために、看護師の触れ方は受動的な働きをしていた。

#### 2) 看護師が認識する「触れる」ことの意義

【手をかざしつつ患者の動きを待つ】ことを意図した触れ方の意義について、看護師A・B・Cは《患者の意思に添う》と認識していた。

まず、看護師Aは次のように語った。

「患者自身が動く気になったり、患者自身で動けたということが一番良いと思うから、患者の意思を尊重したい。そのために、患者に心づもりをして貰い、動きを待つ」

看護師Aは、患者に「心づもりをして貰う」ために、身体を動かすその時だけでなく、動かす前に説明し了解を得ることも重視していた。例えば、医師

の回診で包帯交換をするために身体を動かす必要がある場合は、回診前にその日看護師Aが担当している患者に、回診で何をするかを予め説明していた。回診の準備と介助については、日々担当が割り当てられており、回診の担当でなければ担当患者の回診時にいない看護師も多かった。その中で、看護師Aは、「その日に担当する患者の準備は、回診の担当にならなくても、私自身がきちんとやっておこうと思っている」と、回診の準備をし、付き添っていた。

また、看護師Bは、《患者の意思に添う》ことについて次のように語った。

「力で無理矢理援助したくはない。患者に同意を得て、患者と私の二人で協力してやっていると思うたいから、患者から動き始めるのを一瞬時間をおいて待ってみた」

看護師Bのこの行為も、看護師Aが語った「心づもり」と同様であり、特に認知障害がある患者の場合は用いていた。ただし、この「待つ」行為は、「患者の意思を尊重する」他に、整形外科疾患患者の看護としての特徴もあった。看護師Bは、「自立を促すことが主にあるので、触れることを取って減らしている。手を出したいけど、必要以上に出してはいけない。それが整形外科疾患患者の看護だと思う」と語った。このように看護師Bは、患者の自立を促すために、取って自分から触れずに患者から触れてくるのを待っていた。

さらに、看護師Cは、《患者の意思に添う》ことについて次のように語った。

「整形外科疾患の患者は動くことに痛みを伴うから、何も言わずに触れることはしない。痛みがある中でどこまで動けるか、ある程度患者自身で動いて貰って、患者の意思を確認しながら手を出している」

### 3) 患者が認識する「触れる」ことの意義

患者bは、看護師Aの清拭を受けた時の触れ方がもたらす意義について、《しなやかに触ってくれることにより痛みが一つ無くなる》と認識しており、次のように語った。

「看護師Aが身体を拭いてくれる時は、私のペースでゆっくり優しく扱ってくれるので、気持ちよく、感じが凄いいい。触っている感じが柔らかく、しなやかに触ってくれる。手術が終わって、その夜も翌日も痛みがあり、股関節の手術はこんなに痛いものかと、一人でボロボロ涙を流して泣いていた。しかし、看護師Aがしなやかに触ってくれれば、痛みが一つ無くなる感じがした」

一方、「忙しそうに雑に拭かれると病人にはきつい。面倒くさいのか、こんなこと自分ですればいいのと思っているのかと思う」と患者bは語った。このような場合には、次回からその看護師の場合は「私が拭くからタオルだけ持ってきてください」と言っている。

また、患者bは、看護師Aの「しなやかな」触れ方から、「患者の担当者として責任を感じておられ、自分がお世話する患者だということを、しっかりと心の中に入れておられる感じがする」と語った。

## 考 察

ここでは、看護技術における「触れる」ことの意義を身体性の観点から考察するために、本研究で明らかになった「触れる」ことの意義を、身体と精神を二分できない両義的な身体の在り方と、看護師と患者両者の相互的な身体の在り方の2点から述べる。

### 1. 身体と精神を二分できない両義的な身体の在り方

両義的な身体の在り方については、看護師が認識する「触れる」ことの意義として見出された《動きを支えると共に、動きに伴う恐れを支える》ことと、患者が認識する「触れる」ことの意義として見出された《覚悟ができる》ことに立ち現れている。《動きを支えると共に、動きに伴う恐れを支える》の中で、動きを支えるとは身体への働きかけを示しており、恐れを支えるとは精神への働きかけを示している。また、《覚悟ができる》は、精神の働きを示している。

ここで、「触れる」ことの意義として、身体を表す動きと精神を表す恐れ両者において同時に「支える」ことが見出されたのは、整形外科疾患患者の看護の特徴であると考えられる。整形外科疾患患者は動く際に痛みを伴うことが多いが、生活行動援助においては、移動は勿論のこと、清潔、排泄、食事など、様々な援助において動くことが伴うため、看護師は、生活行動援助時の痛みを少なくするように「触れる」際に身体と精神を同時に支える工夫をしていた。まず、【注目を惹きつける】ことにより、これから動くということへの「心づもりをして貰う」ことにより精神を支えるようにし、次に、【行動に手を添える】ことにより、身体を支えつつ動きを誘導あるいは抑止するよう調整し、痛みが少なくスムーズに行動できるようにしていた。

両義的な身体の在り方から考えると、看護技術における「触れる」という行為は、姿勢を支えることや、身体を拭くために下肢を持ち上げることなどの

客観的な身体への働きかけにとどまらず、同時に痛みや恐れなどの主観的な精神への働きかけとしての意義を有するといえる。「痛みが怖い」と言語で表現しなくても、握り合っている手の感触を通して、看護師は患者の恐れを直接的に受け取ることができる。また同時に、握っている手の感触を通して、看護師は「しっかり支えているから大丈夫」と安心を送り返すこともできる。その感触に応じて、患者も動くことへ《覚悟ができる》域に至っている。

ここで実際に触れ合っているのは看護師の身体と患者の身体であり、身体同士の働きかけであるが、その身体を通して互いの精神にも同時に働きかけているといえる。この精神への働きかけは、看護師が意図したことだけが伝わるのではない。《動きを支えると共に、動きに伴う恐れを支える》という意義をもって【行動に手を添える】触れ方をした場合には、患者は「自分がお世話する患者ということをし、しっかりと心の中に入れておられる」と、看護師の意図を受け取っている。しかし、一方では、看護師の触れ方によって、患者は「この看護師は面倒くさいと思っているのか」と受け取る場合もある。そのため、看護師は看護技術を提供する際に、その触れ方から、患者の精神を把握できると同時に、看護師自身の精神も患者に向かって伝わっていることを自覚しておくべきであると示唆された。

## 2. 看護師と患者両者の相互的な身体の在り方

相互的な身体の在り方については、看護師が認識する「触れる」ことの意義として見出された《患者の意思に添う》ことと、患者が認識する「触れる」ことの意義として見出された《しなやかに触ってくれることにより痛みが一つ無くなる》ことに立ち現れている。

看護師が「患者の意思を尊重したい」「患者に同意を得て、患者と二人で協力してやっていると思いたい」と思い、【行動に手を添える】【手をかざしつつ患者の動きを待つ】という意図を持って患者に触れていることは、患者にとって「私のペースでゆっくり優しく扱ってくれる」「しなやかに触ってくれる」ととらえられていた。《患者の意思に添う》ことは「患者の意思を尊重したい」という看護師の看護観を示していると考えられるが、この看護観は患者に対して言語で表現しなくても、「私のペースでゆっくり優しく扱ってくれる」というように、患者に十分伝わっていた。

さらに、「自分がその日に担当する患者の準備は、自分がきちんとやっておこうと思っている」という

看護師の姿勢も、ことさらに言語で表現しなくても、「患者の担当者として責任を感じておられ、自分がお世話する患者だということを、しっかりと心の中に入れておられる」と患者に伝わっていた。

相互的な身体の在り方から考えると、看護技術における「触れる」という行為は、言語を介さなくても、身体と身体を介して看護技術を提供する中で行われる、「触れる」と同時に「触れられる」働きかけを通して、看護師から患者へ、また患者から看護師への、身体を介したコミュニケーションとしての意義を有するといえる。この身体を介したコミュニケーションは、看護師と患者の相互の関係性を深めることに繋がると考えられた。しかし、一方では、前述のように、看護師の触れ方によって、患者が「この看護師は面倒くさいと思っているのか」と受け取った場合には、身体を介したコミュニケーションにより、関係性が疎遠になることも示唆された。

## 本研究の限界と今後の課題

本研究では、看護師および患者の語りに重点を置いて、看護師が意図して行った「触れる」という行為を契機として看護技術における「触れる」ことの意義を明らかにした。しかし、看護師が意図せず行った「触れる」行為にも「触れる」ことの意義は存在すると考えられる。そのため、今後は、今回の結果をもとに、看護師が看護技術を提供する場面を詳細に参加観察することによって、看護師の意図を契機としない触れ方について明らかにし、看護技術における「触れる」ことの意義を探索することが課題である。

## 結 語

整形外科看護師が生活行動援助技術を提供する際の「触れる」という行為に焦点を当て、看護技術における「触れる」ことの意義を明らかにすることを目的として、本研究に取り組んだ結果、次のことが明らかになった。

1. 「看護師が行った触れ方の意図」として、【注目を惹きつける】【行動に手を添える】【手をかざしつつ患者の動きを待つ】の3つの意図が見出された。
2. 【注目を惹きつける】ことを意図した触れ方について、看護師は《次に続く行為への合図を送る》意義があると認識していた。
3. 【行動に手を添える】ことを意図した触れ方について、看護師は《動きを支えると共に、動きに伴う恐れを支える》意義があると認識しており、患

者は《覚悟ができる》意義があると認識していた。

4. 【手をかざしつつ患者の動きを待つ】ことを意図した触れ方について、看護師は《患者の意思に添う》意義があると認識しており、患者は《しなやかに触ってくれることにより痛みが一つ無くなる》意義があると認識していた。

### 謝 辞

本研究の実施にあたり、データ収集にご協力いただきました看護師および患者の皆様、また、データ収集の場を提供してくださいました看護部長様並びに看護師長様に、心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成15年度日本赤十字広島看護大学共同研究費（奨励研究）の助成を受けて行ったものである。

### 文 献

- Estabrooks, C. & Morse, J. (1992). Toward a theory of touch—the touching process and acquiring a touching style—. *Journal of Advanced Nursing*, 17, 448-456.
- 藤野彰子 (1998). 看護とタッチに関する研究動向—1970年代から1990年代まで—. *看護研究*, 31(5), 9-19.
- 藤野彰子 (2003). *看護とタッチに関する実践的研究—終末期がん看護に携わる看護師の用いるタッチ—* (初版). 東京, 風間書房.
- 廣松 渉, 子安宣邦, 三島憲一, 宮本久雄, 佐々木力, 野家啓一, 末本文美士編 (1998). *岩波哲学・思想事典* (初版). 東京, 岩波書店.
- 池川清子 (1991). *看護—生きられる世界の実践知—* (初版). 東京, ゆみる出版.
- 池川清子 (1996). 看護における哲学的課題—看護技術論への試み—. 山崎知子監, *明解看護学双書 I 基礎看護学 I* (初版). (pp. 51-58). 東京, 金芳堂.
- 川西美佐 (2003). 看護技術における身体性. *日本赤十字広島看護大学紀要*, 3, 9-17.
- 野島良子 (1977). 看護における技術と身体. メヂカルフレンド社編集部編, *看護技術論* (初版). (pp. 300-325). 東京, メヂカルフレンド社.
- 土蔵愛子 (2001). タッチ (Touch) に関する研究と実践の動向からみた今後の研究課題. *臨床看護研究の進歩*, 12, 10-16.



# **The Meaning of ‘Touch’ in the Art of Nursing: A Study of Corporeality in Orthopedic Nurses’ Support of Patients’ Daily Activities**

**Misa KAWANISHI\***

## **Abstract:**

The purpose of this research was to focus on the use of ‘touch’ by orthopedic nurses to help their patients’ daily activities, and to explain the meaning of ‘touch’ in the art of nursing. Data were obtained by interviewing and observing three orthopedic nurses and four patients who acted as subjects.

The study identified three functions of nurses’ touching: 1) to attract patients’ attention, 2) to use their hands to guide patients’ actions, and 3) to extend nurses’ hands while waiting for patients’ actions. With regard to the first function, the nurses’ touch was intended to gain the patient’s attention in order to signal the next action. With the second function, the touch was meant to reassure the patients prior to some movement as well as to physically support the patient’s movement. With the third function, the nurses were aware that they could use their hands to elicit the patients’ voluntary actions, whereas the patients realized that the nurses’ light touch could ease their pain.

## **Keywords:**

art of nursing, touch, corporeality

---

\* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing